た。また，県外からの受診患者は50名であった。受診患者の最も多い県中地区の詳細は本学附属病院がある郡山市が1,236名と最も多かった。5．日曜日の受診患者が最も多く，次いで土曜日だった。平日においては休み明けの月曜日に受診患者が多くみられた。6．曜日別受診患者数において平日では診療時間終了直後の17時代に最も多く受診していた。土曜・日曜・祝日では受診患者は9時代から増加し，13時代に最も多く受診していた（12時代を除く）。7．疾患別受診患者数において初診患者の疾患分類では口腔外科系・保存系疾患で8割以上を占めていた。再来患者では補綴系疾患が多く，その内最も多いのが暫間補綴物脱離であった。

（結　語）　今後は休日・夜間受診患者数の増加に伴い，さらなる各科からの支援体制の強化が必要になると思われた。

8）特異的な経過を辿った補綴物誤嚥の1例

○平野　千鶴，宮島　　久，強口　敦子，馬庭　暁人
中戸川倫子，大友　友昭，古田　摂夫，大溝　裕史
（会津中央病院歯科口腔外科）

歯科治療中の補綴物誤嚥は，比較的よくみられる偶発事故の1つである。しかし，誤嚥した異物の90%以上は，1週間以内に体外に排出され，合併症を併発することは少ないと言われている。今回われわれは，メタルコア調整時に誤嚥し，1週間以上体内に停滞した後，内視鏡下に除去を試みようとした段階で，自然排出されていた1例を経験したので，その概要を報告した。

患者は，74歳の女性。上下顎義歯の新製を主訴に当科を初診となった。既往歴として，3歳児に脳性小児麻痺。20年程前より高血圧症および高脂血症にて内服加療中。14年前より，原因不明の筋力低下にて車椅子生活。3年前より，複数部位による変形性関節症を発症している。初診の1ヶ月後，患者水平位にて右側上顎犬歯のメタルコア調整時，誤って患者の咽頭部にメタルコアが落下，誤嚥した。その際，咳嗽反射は認めなかった。即座に腹部X線撮影にて異物の位置を確認。胃内部にメタルコアを認めたため，自然排出を期待して，繊維性食物の摂取を指導し1週間の経過観察期間をおいた。誤嚥の1週間後，再度腹部X線撮影にてメタルコアの位置を確認するも，誤嚥時とほぼ同部位に停滞していたため，当院消化器科へ除去を依頼。しかし，患者の都合で実際に消化器科を受診になったのは，誤嚥後11日目であった。消化器科受診時，再度腹部X線撮影を行ったところ消化管内にメタルコアは認められず，自然排出されていた。

9）下顎遊離端義歯にＲＰＩクラスプを設定した支台歯の挙動

○生田　泰之，島崎　政人，山根　州尊，山森　徹雄
池田　祐一，小林　康二，清野　和夫
（奥羽大・歯・補綴Ⅱ）

（目　的）　ＲＰＩクラスプを直接支台装置とする下顎片側遊離端義歯に対して機能圧を負荷したときの支台歯の三次元的変位をシミュレートモデルを用いて調べるとともに，直接支台装置を設置した支台歯周囲歯槽骨の吸収による変化を検討した。

（方　法）　下顎左側第一，第二大臼歯欠損を想定した顎模型に対し，解剖学的形態を付与した支台歯と裏層用シリコーンラバーを用いた疑似歯根膜と疑似粘膜を設定した。支台歯周囲歯槽骨の吸収程度を歯冠歯根長比1：2の「吸収なし」と1：1の「1／4吸収」の2条件とした。直接支台装置は下顎左側第二小臼歯にKrol型ＲＰＩクラスプ，間接支台装置は下顎右側第一小臼歯に近心レスト，第二大臼歯に遠心レストを設置したエーカースクラスプとした。大連結子はリンガルバーとし，コバルトクロム合金を用いてすべての構成要素を一塊として鋳造した。荷重点は支台歯遠心面から12㎜遠位の歯槽頂，舌側部，頬側部とし，2kgfを垂直荷重した。支台歯の挙動は支台歯から垂直に延長した測定竿の先端に取り付けた磁石の動きをシロナソアナライザーⅢを使用して測定した。

（結果と考察）　支台歯周囲の歯槽骨吸収や荷重点に関わらず支台歯は近心舌側方向に変位した。また1／4吸収の舌側荷重時には変位量が増大し，頬側荷重時にはより近心方向の変位を示した。これは，RPIクラスプの近心レストの効果と顎堤の傾斜に沿って義歯床が近心方向に推進した結果と